

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月24日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K12949

研究課題名(和文)ラーニング・コモنزの学生スタッフに必要な能力と正課外教育での自己調整学習の研究

研究課題名(英文) Research that to find approach to promote student's self-regulation in outside the standard curriculum through activity of student staff in the Learning Commons

研究代表者

遠海 友紀 (ENKAI, Yuki)

東北学院大学・ラーニング・コモنز・特任助教

研究者番号：20710312

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ラーニング・コモنز(以下、LC)の学生スタッフに必要な力の検討と、自己調整学習の力の習得を目指した正課外活動を行う際の方法の検討を目的とした。その結果、調査対象のLCの学生スタッフの活動には、LCについての知識、聞く力、対応力、伝える・説明する力、リーダーシップ、企画・提案力、気づく力、ICTに関する知識など、知識・技能、資質・能力に関することに加えて、意識・態度も重要なことがわかった。また、目標を設定し、他者と振り返る機会を定期的に取り入れることで、活動への達成感に気が付いたり、自身の課題に気が付いて改善に向けた取り組みの検討につながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の学術的意義や社会的意義として、次の2点が考えられる。ラーニング・コモنز(以下、LC)で活動する学生スタッフに求められる能力やその育成の手立てを明らかにすることは、他大学のLCでの学生スタッフの運用にも活用することが可能であると考えられる。また、大学教育の目的として、学生の学習態度を自律的なものに転換させることは、大学生活だけでなく卒業してからも重要な力である。LCでの学生スタッフの活動の中で、どのように学生の自律的な学習態度を促す取り組みができるのかについて検討することは、他の正課外活動においても有用な知見となると考える。

研究成果の概要(英文)： There are two goals in this research. One is to find out competency that for student staff who work in the Learning Commons. Second is to make a mechanism that to promote student self-regulation in outside the standard curriculum.

As a results of this research, there are eight competency (Knowledge about Learning Commons where they working, empathetic listening skills, ability to accommodate a client request, ability to explain clearly to client and their group member, readership, planning ability, observation skills and knowledge about how to use ICT tools.) that necessary for activity of student staff in Learning Commons. In addition to this, to incorporate the process of setting objectives and reflection in once a month, it has positive effects. This activity contributes to student staff's accomplishment for their works. Furthermore, student could find their problems and try to improve it.

研究分野：教育工学

キーワード：ラーニング・コモنز 学生スタッフ 正課外教育 自己調整

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2012年、文部科学省中央教育審議会から「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」が出され、学生の主体的な学修を促す必要性が明確に打ち出された。その取り組みとして、大学では学習環境の整備が行われており、その代表的な取り組みの1つとしてラーニング・コモンズ(以下、LC)の整備が挙げられる。LCとは、主として学生を対象とし、学習支援のための設備・施設、人的サービス、資料を総合的にワンストップで提供する学習支援空間(呑海・溝上, 2012)である。LCの設置件数は年々増えていることが文科省(2015)の調査結果からも明らかであるが、その具体的な運用は大学の文脈や学生の状況に合わせて検討される必要がある。

LCの運営には、教職員に加え、院生や学部生も学生スタッフとして関わる事例が多くみられる。学生スタッフの活動内容は大学によって様々であるが、学生目線で利用者のニーズを踏まえた学習環境や学習支援の提案・検討ができるという点で、学生スタッフはLCの運営において重要な役割を担うことが期待されている。LCでの学生スタッフの活動には、教職員が支援を行う事が多いが、学生スタッフは言われたことだけに取り組むのではなく、自分たちで課題を発見し、その解決策を検討するなど、自律的に活動することが求められる。こういった中で、学生スタッフがLCで活動するにあたって、どのような能力が必要となるのか、それはどういった形で習得され、評価されるのか、ということは明らかになっていない。

また、LCでの学生スタッフの活動は正課外教育の機会として捉えることができる。LCの学生スタッフとしての活動は、自ら問題解決に取り組むことが必要であることから、自律的な学習態度が求められる。自律的な学習態度については、Zimmerman(1988)などによって自己調整学習として研究されている。自己調整学習は、学習者が自ら目標を立て、実際に課題に取り組む、その結果を省察する3つの過程で構成されているが、学習者がはじめから適切な目標設定や自己評価をすることは用意ではない。LCでの学生スタッフの活動を通して自己調整学習の力を身につけることを目指す場合は、そのための支援が必要である。

研究代表者はこれまで、初年次教育において学習を進める際の指針となる評価基準表を学習者自身が作成し、それを評価に用いる授業の効果についての調査研究に継続的に取り組んできた(遠海・村上2015など)。その結果、評価基準を学習者自身が作成することは、学生の自己調整学習を促すことに寄与することなどがわかった。自己調整学習を促す取り組みに関する研究については、今後、正課外学習ではどのような取り組みが適切なかを明らかにするなど、さらに研究を発展させる必要がある。また、こういった取り組みを検討するには、実際の活動内容と切り離して検討することは難しいため、今回の対象であるLCの学生スタッフに求められる能力を明らかにすることも併せて取り組む必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では、LCの学生スタッフに求められる能力とその習得に必要な仕組みの検討と、自己調整学習の力の習得を目指した正課外活動を行う際の方法の検討を行うこととした。

### 3. 研究の方法

本研究では、東北学院大学のLCを調査フィールドとした。東北学院大学は、2016年9月にLCを開設した。ここでは様々な機器や道具を用いてグループで作業できる学習環境を提供するだけでなく、アカデミックスキルを中心とした学習支援を行っている。該当のLCが設置されたキャンパスの事情から、主な利用者は文系学部3・4年生である。また、該当のLCでは、2017年度後期から、学生スタッフの運用を本格的に始めた。2017年度の学生スタッフは学部生3名と大学院生1名の計4名、2018年度は学部生7名と大学院生1名の計8名で活動に取り組んだ。

本研究では、先に述べた通り2つの目的を設定したが、それぞれを明らかにするために、具体的に(1)から(4)の調査を行った。LCの学生スタッフに求められる能力とその習得に必要な仕組みの検討については、まず、(1)先行研究のレビューや調査対象のLCの状況を調査し(遠海ら2017a、遠海ら2017b、嶋田ら2017、嶋田ら2018、遠海ら2018a、遠海ら2018b)、その結果を踏まえて2017年度後期のLCでの学生スタッフの活動を検討・運用した。(2)LCでの学生スタッフとして必要な力を明らかにするために、2017年の年度末に活動を振り返ることでLCでの学生スタッフに求められる力やそのために必要な研修などを検討し(遠海2019)、それを踏まえて2018年度の活動を検討・運用した。また、2018年度の活動についても同様の振り返りを行い、LCでの学生スタッフに求められる力やそのために必要な研修などを再検討した(遠海・嶋田・稲垣2019)。2017年度の活動を振り返った結果、(3)LCでの学生スタッフに求められる力の1つとしてチームワーク力が挙げられたため、通常の業務や研修に加え、チームワーク力に関する研修とその評価にも取り組んだ(帖佐・遠海・稲垣2019)。(4)自己調整学習の力の習得を目指した正課外活動を行う際の方法の検討については、学生スタッフが話し合いながら自分たちで活動の目標を設定し、自己評価を行う取り組みをLCでの学生スタッフの活動に取り入れた実践を2017年度後期から2018年度後期まで行い、方法やその成果に

について検証した。

#### 4. 研究成果

研究目的で提示した2つの目的を明らかにするために設定した(1)から(4)の調査結果それぞれについて、以下にまとめる。

##### (1) 調査対象のLCの状況の調査

LCでの学生スタッフの活動を検討するにあたり、先行研究のレビューや、調査対象のLCの利用者の状況を明らかにする必要がある。カウンターでの利用者対応など、すでに学生スタッフの活躍が求められる活動もあったが、学生スタッフが利用者への学習支援にどのように関わることができるのかなども検討するため、LCの利用が想定される学生への調査や、LCでの利用者の学習活動についての調査など6つの調査(遠海ら2017a、遠海ら2017b、嶋田ら2017、嶋田ら2018、遠海ら2018a、遠海ら2018b)を行った。その結果、LCの利用者として想定される学生の学習時間は比較的短く、静かな環境での学習を好む学生が多いことがわかった。また、学習に関するモチベーション維持に関して困ったこと経験があることや、学生の多くは友達に相談して困ったことを解決しているが、LCでの学習相談の利用を約8割の学生が肯定的に捉えていることなどもわかった。一方、自分の学習にLCをどう活用していいのかわからない学生や、学習相談の利用方法が分からなかったり、心理的に相談しにくいと感じている学生もいることがわかった。これらの結果からまずはLCの利用方法やサービスをもっと学生に周知する必要があることが明らかになった。そのため、調査対象のLCの学生スタッフは、2017年度はカウンターでの利用者対応や環境整備、2018年度は2017年度の活動に加え、広報活動やセミナーなどの企画に取り組むことになった。学生スタッフがカウンターで対応することで、他の利用者も施設への興味を持ちやすくなることや、学生同士で相談がしやすくなることを期待した。また、広報活動や企画では学生の視点を活かし、学生がLCに対してさらに親しみを持つことや、学習活動へのモチベーションに寄与することを目指した。

##### (2) LCでの学生スタッフに求められる力

2017年度と2018年度の活動終了後に、学生スタッフ自身が振り返りを行い、学生スタッフの活動にどのような力や知識が必要なのか検討した。そこで得られた意見を基に、学生スタッフとして必要な力について検討した。2017年度の活動の後の振り返りでは、LCについての知識、聞く力、対応力、伝える・説明する力、リーダーシップ、企画・提案力、気づく力、ICTに関する知識、の8つに整理された。特に伝える・説明する力に関する記述が多くみられた。また、力や知識以外にも、笑顔、機敏さ、利用者目線、思いやり、計画性、環境をよくする意識、向上心、好奇心や責任感も重要であるという結論になった。一方、学生スタッフ内での円滑な情報共有の難しさが課題として挙げられた(遠海2019)。2018年度の活動終了時にも2017年度と同じように振り返りを行い、出された意見を整理したところ、2017年度の結果と同様、伝えたり説明したりする力に関する意見が多く出された。2018年度の調査では出された意見を知識・技能、資質・能力、意識・態度に整理することで、より分かりやすく必要な力について整理することができた(遠海・嶋田・稲垣2019)。

##### (3) チームワーク力に関する研修とその評価

2017年度の学生スタッフの活動を検証した結果、スタッフ内での円滑な情報共有の難しさなど、チームワークに課題がみられることが明らかになった。そこで、チームワーク力の向上を目的とした4回の研修を実施した。プレボストの質問紙調査と研修終了後にインタビューを行い、研修の効果を検証した(帖佐・遠海・稲垣2019)。その結果、研修を受けた後の方がチームワーク力に関する自己評価12項目中10項目の平均値が上がった。また、学生スタッフたちは研修で得た知識や失敗経験を、学生スタッフの活動に活かしていたことが確認できた。

##### (4) 自己調整学習の力の習得を目指した正課外活動を行う際の方法の検討

自己調整学習の力の習得を目指した活動をデザインし、2017年度に開始した学生スタッフの活動の中に取り入れた。この活動ではまず、学生スタッフで話し合い、全員で1つの目標を設定する。その目標を達成するための具体的な行動については個人で検討し、設定した目標と行動を意識しながらそれぞれが日々の活動に取り組む。1か月後に、設定した目標の達成度合い、反省点・良かったこと・今後に向けてどうしたいかなどを個人で検討し、その結果を学生スタッフ間で共有したり、アドバイスを言ったりしたうえで、次の目標を全員で再度検討した。このサイクルを継続的に行うことで、活動に取り組む際の目標への意識付けや、目標を設定し振り返りを行う自己調整学習のサイクルの習得を目指した。これらの活動を通して、学生スタッフは他者の意見も踏まえて自分の状況を客観的に確認し、目標を設定していた。また、目標を意識して活動に取り組み、全員で振り返ることで、達成感や自身の課題に気が付き、改善に向けた取り組みを考えることができた。

<引用文献>

- 遠海友紀・村上正行(2015)「論証文作成の際に評価基準を作成した学生の気づき」日本教育工学会第31回全国大会講演論文集、pp.159-160
- 遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・村上正行・稲垣忠(2017a)「東北学院大学 学部2年生の授業時間外学習に関する調査 ラーニング・コモンズでの学習支援の検討に向けて」大学教育学会第39回大会発表要旨集録、pp.246-247
- 遠海友紀・嶋田みのり・村上正行・稲垣忠(2017b)「大学での学習における学生の問題解決行動の分類 ラーニング・コモンズの学習相談に対する文系学部3年生の認識」日本教育工学会第33回全国大会講演論文集、pp.631-632
- 遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・稲垣忠・加藤健二(2018a)「東北学院大学 文系学部3年生の授業外学習とラーニング・コモンズの利用に関する調査」大学教育学会第40回大会発表要旨集録、pp.186-187
- 遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・稲垣忠(2018b)「授業外学習・主体的な授業態度とラーニング・コモンズの利用についての調査」東北学院大学 法学部3年生の事例、日本教育工学会第34回全国大会講演論文集、pp.409-410
- 遠海友紀(2019)「ラーニング・コモンズ「コラトリエ」における学生スタッフの活動—2017年度の取り組みについて—」東北学院大学教育研究所報告集19巻、査読なし、pp.57-66
- 遠海友貴・嶋田みのり・稲垣忠(2019)「ラーニング・コモンズで活動する学生スタッフの学び—東北学院大学ラーニング・コモンズの学生スタッフを事例として—」日本教育工学会第35回全国大会講演論文集、印刷中
- 嶋田みのり・遠海友紀・村上正行・稲垣忠(2017)「ラーニング・コモンズの学習環境に対する学生の認識」日本教育工学会第33回全国大会講演論文集、pp.639-640
- 嶋田みのり・遠海友紀・佐藤恵・稲垣忠・加藤健二(2018)「学部ゼミ担当教員がラーニング・コモンズに期待する学習支援に関する調査」大学教育学会第40回大会発表要旨集録、pp.188-189
- 帖佐和加子・遠海友紀・稲垣忠(2019)「ラーニング・コモンズの学生スタッフを対象としたチームワーク研修の実践」日本教育メディア学会研究会報告集第46号、pp.1-10
- 呑海沙織・溝上智恵子(2012)「日本の大学図書館における学習支援の現状」大学図書館問題研究会誌、第35号、pp.7-18.
- 文部科学省(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2019年6月17日確認)
- 文部科学省(2015)「大学における教育内容等の改革状況について(平成25年度)」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm) (2019年6月17日確認)
- Zimmerman B. J. (1998) "Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: An analysis of exemplary instructional models". In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.), *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice*. New York: Guilford Press, pp. 1-19

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1件)

遠海友紀(2019)「ラーニング・コモンズ「コラトリエ」における学生スタッフの活動—2017年度の取り組みについて—」東北学院大学教育研究所報告集19巻、査読なし、pp.57-66

[学会発表](計 8件)

遠海友紀・嶋田みのり・稲垣忠(2019)「ラーニング・コモンズで活動する学生スタッフの学び—東北学院大学ラーニング・コモンズの学生スタッフを事例として—」日本教育工学会第35回全国大会講演論文集、印刷中

帖佐和加子・遠海友紀・稲垣忠(2019)「ラーニング・コモンズの学生スタッフを対象としたチームワーク研修の実践」日本教育メディア学会研究会報告集第46号、pp.1-10

遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・稲垣忠(2018)「授業外学習・主体的な授業態度とラーニング・コモンズの利用についての調査」東北学院大学 法学部3年生の事例、日本教育工学会第34回全国大会講演論文集、pp.409-410

遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・稲垣忠・加藤健二(2018)「東北学院大学 文系学部3年生の授業外学習とラーニング・コモンズの利用に関する調査」大学教育学会第40回大会発表要旨集録、pp.186-187

嶋田みのり・遠海友紀・佐藤恵・稲垣忠・加藤健二(2018)「学部ゼミ担当教員がラーニング・コモンズに期待する学習支援に関する調査」大学教育学会第40回大会発表要旨集録、pp.188-189

遠海友紀・嶋田みのり・村上正行・稲垣忠(2017)「大学での学習における学生の問題解決行動の分類 ラーニング・コモنزの学習相談に対する文系学部3年生の認識」、日本教育工学会第33回全国大会講演論文集、pp.631-632

嶋田みのり・遠海友紀・村上正行・稲垣忠(2017)「ラーニング・コモنزの学習環境に対する学生の認識」、日本教育工学会第33回全国大会講演論文集、pp.639-640

遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・村上正行・稲垣忠(2017)「東北学院大学 学部2年生の授業時間外学習に関する調査 ラーニング・コモنزでの学習支援の検討に向けて」、大学教育学会第39回大会発表要旨集録、pp.246-247

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

なし

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：嶋田 みのり

ローマ字氏名：SHIMADA Minori

研究協力者氏名：帖佐 和加子

ローマ字氏名：CHOSA Wakako

研究協力者氏名：稲垣 忠

ローマ字氏名：INAGAKI Tadashi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。